

特集：レジャー・レクリエーション研究における基本書

「環境計画」空間・環境形成研究（造園学）の分野から

前野 淳一郎\*

From the Viewpoint of the Studies on LANDSCAPE DESIGN

Jun-ichirō MAENO

1 はじめに

昨年4月、学会会長への就任に際して学会ニュースの59号にも書かせて頂いたのだが、私は、昭和40年に当学会の前身である日本レクリエーション研究会が発足した当初より、専ら「レクリエーション活動を受け入れて、その舞台となる『場』・空間・施設・環境等」の分野を研究しその形成・整備を担当・実践する立場から、会員として参加をしてきた。当時、アメリカ合衆国の都市公園や国立公園で盛んに進められていた「Parks & Recreation」運動のような姿・時代が、いつの日か我が国にもやって来るに違いない、と夢見たものである。

その後、本学会の名称と学問研究の対象はレジャー・レクリエーションへと大きく広がることとなったが、空間・施設・環境の研究分野でも、今までのレクリエーションに専ら特化した施設空間（庭園・公園、遊園地・盛り場、レジャー施設、文化・スポーツ体育施設等）の問題から、アメニティであるとか景観問題、観光地やリゾート開発の問題、自然・歴史環境の保全や市民参加によるまちづくり、そしてエコロジーやノーマライゼーション、セラピーの問題等々、時代の推移ともない、新しい展開をみるようになった。人々の「活動・行動／生活様式」と国土の「空間・環境／装置・場」との間における相互の複合・融合を含んだ「整合」が、今日最も求められているというべきだろう。

さて、人々が展開をする生活・生産様式の『場』・舞台は、「住居」からはじまって、その集合体としての「まち」「むら」、「仕事場としてのオフィス・工場等」、それらを結ぶ「みち」、広大な「農林水産業」空間、自然が主体となる「山・川・海」の空間に至るまで、広範かつ多様である。インテリアを含めた総ての生活空間、そして生産空間のなかに、レジャー・レクリエーションの要素はオーバーラップし浸透していくべき、というのが私の年来の主張なのだが、人々の意識・志向が「レジャー・レクリエーション」を需めているかぎりにおいて、いずれはそのような姿に「成るべくして」成っていくに違いない、と私は確信をしているのである。

これらの空間・環境の形成／整備に関わる技術の研究分野は、建築学、造園学、土木学、都市計画学、地域計画学、そして農学、農業土木学、林学、水産学等々、極めて多岐に亘っている。本来的に、これらの応用学問体系の中の重要な一部門としてレジャー・レクリエーション研究が位置づけられなければ、優れた『場』・空間・環境の形成は望みえないというのが、これまた私の主張するところである。大分前のことだが、私は土木学会の会誌に「レクリエーション土木学」を提唱したことがある。またある大学の林学会誌に、「林業と観光レクリエーション」の関係について寄稿したり、看護技術という雑誌に「病院そのものの全体のレクリエーション空間化」が必要であることを説いた。

\* (株)スペース・コンサルタンツ SPACE CONSULTANTS Co. Ltd.

ようやく最近になって、道路とか河川、都市や農山村等の空間のレクリエーション環境化の問題について、多くの研究成果が見られるようになった。特に景観形成に係る研究や、まちづくり研究等の分野での成果はこのところ著しいものがある。しかし、本特集が掲げる「基本書／グレートブックス」ということになると、私のアンテナが鈍い故もあって、のちに掲げる個別的なテーマのもの以外には、包括的な基本書ともいえるべき書物を示すことができないのは残念である。

ところで、いささか我田引水の誹りを承知の上で言うならば、「造園学」は専らレジャー・レクリエーション（アウトドアが中心となるが）の場・空間・環境を対象として研究する分野なのである。その様な事情もあって、また私自身（社）日本造園学会に一会員として籍を置く立場から、本稿では造園学の分野における基本書と目されるものをお示しして、空間・環境分野以外の、特に若い研究者の皆さんのご参考に供したいと思う。

また、「観光研究」というジャンルも、レジャー・レクリエーションに関連した重要な学問分野であり、造園学を含む多くの研究者を擁していて、基本書ともいえるべき書物が沢山あるようだが、ここではあえて除外することとした。「造園学」の基本書のなかには、少なからずこの分野に触れているものがあるので、ご関心の向きはこれらを参照されたい。

## II 「造園学」の分野等における基本書

まず、伝統的にこの分野における中心課題であった「庭園」「公園」「自然公園」の、近・現代における歴史的な展開を学ぶための基本書として、田中正大氏の三部作を掲げたい（基本書一覧の15,25,38. 以上下同様）と思う。いずれも確固たる問題意識・歴史観の下に、学問的な厳密さをもってとりまとめられた名著といえるべき書物で、研究者はこのなかから多くの示唆を受け取ることになるだろう。丸山宏氏の著書（78）は、上の三部作によって書かれた以降の資料等をふまえていて参考となるだろう。

次に、造園技術研究の全分野（歴史、原論、環境、計画、施設、設計、施工、材料、サービス運営管理、政策等）を網羅して記述・解説されている「全書」「体系」「ハンドブック」「事典」に類する書物がある

（10,14,31,07）。これらは夫々1961年から1996年に互って刊行されたものだが、いずれもが大部のものなので、これらの全部に目を通すことは難しそうだ。

また、他の分野と同様に造園学そのものも、個別専門分野の細分化が進んで情報量が増え、その全貌を把握することが中々困難になりつつある。特に1970年代以降にその傾向は著しく、1978年に出版された「造園ハンドブック（31）」や、1996～の「ランドスケープ体系（91）」あたりになると、膨大な専門的情報が含まれていて、他分野の初心者にとってはいささか取り付きにくいきらいもある。ただこれらには、最新の研究の最先端がレビューされており、夫々の研究分野の専門の人々による分担執筆という形が取られているので、個別の分野についてより理解し究めたい研究者達にとっては、必見の書物といえるかもしれない。

一方、造園の本質・意味を理解するについては、「造園技術大成（10）」のような原点をふまえた基本書を読むのがいいだろう。その点「造園の事典（87）」は、造園技術の全体系を手軽につかむためには便利かもしれない。

造園の各分野にまたがる多くの専門家達によって分担して書かれた包括的な書物としては、このほかに「環境を創造する（46：写真1）」、「緑の環境デザイン（48）」、「造園を読む（74）」、「市民ランドスケープの創造（91：写真2）」、「緑地環境科学（井手久登編、朝倉書店、1997）」のようなものがある。また一方、

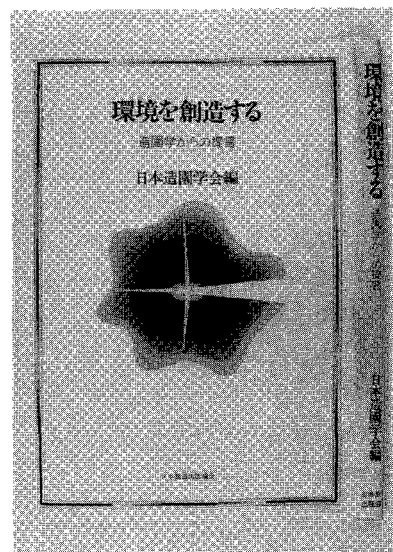


写真1

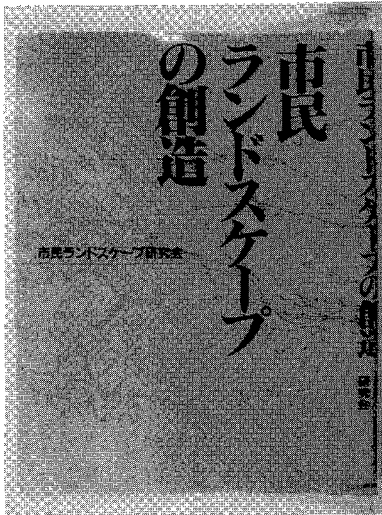


写真 2

個人が造園の全般に互って縦横無尽に熱情的に論じた書物として「郷土設計論 (41)」、「緑のまちづくり学 (57)」、「アメニティデザイン (67: 写真 3)」がある。

「環境を創造する」には、私も「観光」の問題について分担執筆をしたのだが、是非とも読んでもらいたい基本書として推しておきたい。また、「造園を読む」も、造園の分野への理解を深めて頂くための好著として推薦をしたい。これらの図書の中核的な著者である千葉大学名誉教授の田畑貞寿先生や東京農業大学教授の進士五十八先生は、いずれも本学会の古くからの正会員で、夫々常任理事や理事をなさった方々であり、レジャー・レクリエーション研究の良き理解者でおられるので、本学会の会員の皆さんには馴染み深くもあり、是非これらの書物を玩味して頂きたいと思う。

かつて本学会が総力を挙げて刊行した「レクリエーション学の方法 (54)」には、「資源と空間」「政策と運動」の章に造園学の分野における研究方法等が紹介されているので御覧を頂きたいと思う。

このほか、個別のテーマで基本書と見做されるものがいくつかあるので、それらを示しておきたい。その一つは、景観・風景の研究分野における基本書である。

「景観の構造 (25)」、「風景学入門 (39)」、「絵になる都市づくり (43)」、「人と景観の歴史 (71)」のうち前二者はいずれも景観・風景の重大な影響を及ぼす土木技術の研究者の手になるもので、この方面の研究者



写真 3

にとつての基本書に相応しい内容をもっている。「絵になる都市づくり」は、建築・都市工学研究者の立場から生活のなかの風景を論じたユニークな思想書である。また「人と景観の歴史」は、造園学を専攻する著者年来の精密な調査研究の成果で、人と自然のかかわりを探求していく上で示唆に富んでいる。

野外レクリエーションと場・環境に関わる研究報告としては「野外レクリエーション白書 (32)」、「アメリカ人のアウトドアレクリエーション (65)」、「アメリカの環境保護運動 (60)」、「アメリカの環境保護法 (69)」などがあり、リゾートに関するものには「リゾート列島 (63)」、観光地づくりについては日本観光協会が刊行している一連の研究報告書類がある。また建築家仙田満氏による、綿密な調査研究と遊び場の設計実践を通じて書かれた「こどものあそび論二編 (44, 69: 写真 4)」は、空間・環境デザインのサイドから子供の遊びを論じたものとして大変ユニークであり、この方面の研究の基本書に相応しいといえるだろう。子供と遊びを論じた貴重な研究書としては、このほか佐瀬一夫氏の著書 (64) がある。

### III レジャー・レクリエーション研究者への期待

さて、本特集では以上に示した「環境計画」分野の基本書のほかに、レジャー・レクリエーションに関わ

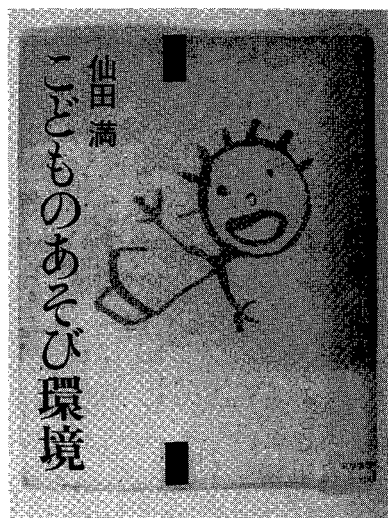


写真 4



写真 5

る「活動・行動」「政策研究」「プログラム開発研究」「福祉研究」「産業研究」「サービス・運営管理研究」などの分野における基本書が紹介されることになっている。

私の期待としては、これら多様に互る分野の研究者、特に清新な若い研究者の方々に、夫々のテーマで研究を進められる際、是非とも空間・環境との関わりについて特段の配慮を及ぼして頂きたいのである。従来、とかくこうした方々（これは一般の人々／生活者を含めていえることだが）は、空間・環境・施設等は既成のものを与えられたものとして認識をし、これらは「やむを得ず、使いこなすべきもの」として、余り関心が寄せられてこなかったように思えてならないのである。

例えば、コミュニティ・レクリエーション活動やカヌーイングやキャンプの研究をされる際に、その活動やプログラムについて調査研究を行なう“序で”に、『場』『空間・環境・施設』に目をむけ、なにがしかの改善方策等を積極的に提案し続けていくことによって、コミュニティ・レクやカヌー、キャンプなどの水準は高まっていくことになるだろう。理想を言えば、空間・環境計画の研究者と一緒に「協働研究」をすることができれば、その成果は期して待つべきものがあるのだ。

以前に本学会では、「レジャー・レクリエーションによるまちづくり」をテーマとしてシンポジウムを開

いたことがある。当時、地域側や本会員の専らの関心事は、いわゆる「地域スポーツ・レクリエーション」の活発化や「イベント・行催事」の開催等による地域の活性化「まちおこし」の問題に向いていたように記憶している。

ところが最近では、地域住民自らが〈ワークショップ〉などを通じて「まちの環境づくり」にダイレクトに参加する機会が多くなってきた。行政側も、この市民参加方式の本来の効用に気付いて、これを積極的に進めるところも増えてきている。

地域に住まう住民達が、日常生活空間の中を「楽しみながら」タウン・ウォッチングをし、環境診断をしながら、地図の上にもいろいろな問題点をプロットしてその解決策を話し合い、行政側に提案をしていく、といった運動が全国にくまなく起こりつつある。歩きながらまちを診断する「タウン・ウォッチング」「地図作り」というレクリエーション活動、そして「ワークショップ」という楽しい話し合い／コミュニケーション活動が、「まちづくり」にとっての有効かつ重要なツールとなってきているのである。「まちづくり読本（62: 写真5）」のような書物・参考書はいまや数多く刊行されつつある（財団法人地域開発センター刊、「地域開発」96年12月号、〈まちづくりワークショップ読本リスト〉参照）。レジャー・レクリエーションの研究者達が、こうした動きに対して大いに関心を寄せて

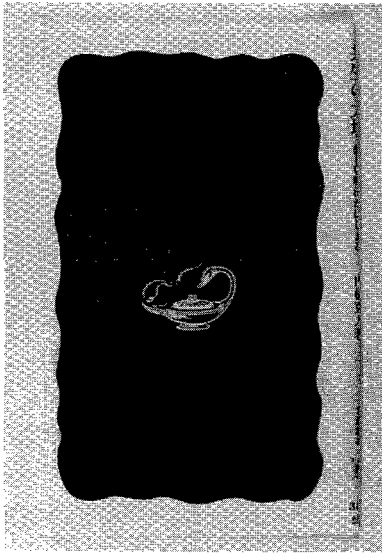


写真 6

欲しいと思う次第である。

#### IV 21世紀に向けて

もうあと3年も経てば、愈々21世紀に突入する。そこにどのような近未来像を描くことができるのか、私に限らず人々にとっての大きな関心事といえるだろう。

政治、経済、社会、いずれも昏迷の状況を呈しているかのように見えるなかで、一定の方向を予言的に示しているのは、A. トフラーの「**未来の衝撃 (13)**」、**「第3の波 (37)**」や「**パワーシフト 上・下、フジテレビ出版、1990**」なのかもしれない。一方このところ、我が国の経済学者、社会学者、地域文明学者等の中に、21世紀に向けての新しいパラダイムを明示して我々を力づけてくれる、次のような労作が表れつつある。

「高橋洋児著、**市場システムを越えて、中公新書、1996**」

「井上信一著、**地球を救う経済学—仏教からの提言—、すずき出版、1994**」

「見田宗介著、**現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来、岩波新書、1996**」

「高谷好一著、**多文明世界の構図—超近代の基本的論理を考える、中公新書、1997**」

「飯田経夫、**日本の反省、PHP新書、1996**」

「佐和隆光、**日本の難問、日本経済新聞社、1997**」

学者によるものではないが、次の書物はこれからの社会・経済を見通す上での必見書といえるだろう。

「内藤克人著、**共生の大地—新しい経済がはじまる、岩波新書、1995 (写真6)**」

これらの何れにも、コメント・解説を述べる学識を私はもたないが、一読の価値ありとしてお薦めしたいと思う。また、私が感銘を受けた書物として、「**人生をいかに生きるか (34)**」、「**労働観試論 (33)**」、「**競争社会を超えて (77)**」、「**日本的スポーツ環境批判 (89)**」の四冊を揚げておきたい。

最後に、最近の世の中の動きを見ながら、私なりに捉えている「**レジャー・レクリエーションに係る日本人の意識と行動様式の大きな変革・変容**」といったことについて、三つばかりそのポイントをお示ししておきたいと思う。

その一つは、「**仕事と遊びの融合、クロスオーバー**」が進みつつあること、である。フリーターの出現とか、時差出勤、在宅・サテライト・リゾート勤務などにその端緒を見ることができるが、サイバー・スペースにあっては、遊びの場や通勤途上などあらゆる場所が仕事場と「化す」のである。職人達や芸術家達の生活は本来がそういうものであったに相違ない。農林漁業に生き甲斐を求めて脱都会を図る人々も増えてきた。

「**仕事の仕方・様式、遊びの仕方・様式**」に、大きな変革が起りつつあるのだ。「**仕事と遊び、生活と生産のボーダーレス化**が進んで、仕事の中に遊び、遊びの中に仕事を見出す人々が増えつつある。いずれは、仕事と遊びを対置させるような考え方は消えていくのではなからうか。このような趨勢の下にあって、レジャー・レクリエーションをどう位置付けていくか、我々研究者にとっての大きな課題であるに違いない。

二つ目は、「**他人のことに思いが及ぶ**」人々が増えつつあることである。ボランティアに参加をする人々はその典型だろうし、効率優先の経済システムや勝負にこだわる競争原理そのものに疑問をもつ人々、他の人々他の生き物達、地球・宇宙とのライブな共鳴を求める「**交流志向**」の人々が、このところ大変な勢いで増えてきているのである。生活空間のバリアフリー化・ノーマライゼーション・福祉化は、まさに「**国土空間全体のレジャー・レクリエーション化／余暇化**」に通づるもので、上の「**仕事の余暇化**」と軌を一にするものといえるだろう。

三つ目は、「地球環境に思いを致し、実践を進める」  
人々「自然／宇宙との一体化を求める」人々が増えて  
いることである。

以上に挙げた三つの変革は、相互に関連し合いなが  
ら派生しているものと私は見ている。心身症の治療法  
として世界的な評価を受けている森田療法では、農作  
業／園芸療法を有効な治療法として実践されている。  
ここには仕事と遊びの融合、自然による癒し、他の人々  
とのコラボレーションなどが包括的に示されている。

（「森田療法、岩井寛、講談社現代文庫、1986」「神経  
症の時代—わが内なる森田正馬、渡邊利夫、TBSプリ  
タニカ、1996、開高健賞受賞」）このようなホーリス  
ティックなアプローチが、これからますます求められ  
てくるのではなからうか。

いささか老人の繰り言めいて長くなったが、皆さん  
がレジャー・レクリエーション研究を進められる上で  
の素材としてご参考になればと思い、あえてしたため  
たような次第である。